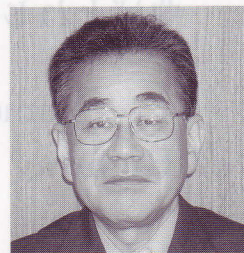


## 「蒔かぬ種は生えぬ」

高橋 勲\*



これはわたくしの好きな「諺=ことわざ」の一つです。普段はあまり聞いたことのない諺ですが、歴とした日本の諺です。

昨年の晩秋のゴルフ帰り、心地よく運転していた時、偶然にも民放ラジオでこの「諺」が話題として取り上げられていました。視聴者参加番組で10名の方に、『日本の諺です「〇〇〇〇は生えぬ」の〇〇〇〇に言葉を入れてください』と問いかけ、10名中9名の方は一様に「毛」「髪の毛」などと答え、残りの70才のおばあちゃんは「抜けた歯」と答えられて爆笑の渦を醸し出していました。

答えはともかくとして、「蒔かぬ種は生えぬ」の諺は、よく読み返して見ると、なかなか言い得ているというか、ちょっと含蓄のある諺にも見えてくるではありませんか。

「蒔かぬ種は生えぬ」とは、「何事、努力をしないと結果はついてこない」という意味で、気が抜けるほど当たり前といえば当たり前、例えば、どんなに肥沃な畑でも春に種を蒔かなければ秋に収穫することはできないとか、才能があっても使わなければ持ち腐れ、とでも理解をすれば良いのでしょうか。

同じような諺に、「春植えざれば秋実らず」というのもあり、また、外国にも同じような諺「Good seed makes a good crop.」（良い種を蒔けば良い作物ができる）というのがありまして、これはもう少し意味が深いと思います。

熟年夫婦の会話に、自分たちの子供の成長と共に「種は良かったけど、畑がなぁ・・・」とか「お父さんのが・・・」とかが、よく出てくるのではないかと思います、お互い様ですけれども。

やはり、良い結果を出すには、良い種、良い畑そして良い環境が必要であることには間違いがないと思います。

さて、年も明け平成17年度も目前となって来ました。17年度はわが開発土木研究所の中期計画の最終年度となり、平成13年に独立行政法人となってからの初めての締めくくりとなると共に、新たな次期中期計画への

架け橋ともなる年度であります。

少し振り返ってみますと、わが研究所の前身は、昭和12年の8月に現在地の精進川のほとりに「北海道庁土木部試験室」として、わずか3名の研究員と数名の試験助手だけという小規模なものだったそうです。

この試験室の誕生の主な理由は、

- 北海道が東京から遠隔の地であること
- 土木工事は気象、地域等の自然環境条件に大きく影響されること
- 長期かつ大規模な工事については、その都度、その地域の条件に合った施工を行うため、調査・研究を必要とすること

などであったとともに、さらに、北海道においては積雪寒冷という厳しい気象条件を克服するための施工対策として、北海道独自の試験研究機関を設置して、より高度なかつ効果的な事業推進を図ることが、当時の土木技術者並びに関係者に広く認識されたためということでした。

その後、研究所の名称は、幾たびか変えてきていますが、その中に流れる、北海道の厳しい積雪寒冷という自然条件のもと国民に安全で快適なインフラ環境（国土）を提供してきた情熱と努力の思いは、現在においても決して変わらず流れているものと確信しています。

先人たちが60数年前に「北海道庁土木部試験室」として蒔いた種が、現在、世界に冠たる積雪寒冷土木技術の成果として生えて（評価）おり、今後においても（独）北海道開発土木研究所として調査・研究および開発を進め、新たな作物を生み出すシーズとなることを目指し続けねばならぬと考えています。

昨年来、独立行政法人の見直し論議が行われ一定の方向性をみたところですが、改めてわが研究所の使命として北海道開発行政と一体となった土木技術に関する研究・開発に取り組み、国民に安全で快適なインフラ環境の提供とともに地域の発展に貢献する研究機関として認識を強め、さらに評価されるよう職員一同努力してまいり所存であります。